
Lace Edge

扇花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Lace Edge

【Zコード】

N4018BA

【作者名】

扇花

【あらすじ】

真砂家次女、真砂三津の恋愛事情。

大変なシスコンです。お相手の利人さんはそれなりに年上。謎なお仕事の人ですが、腕つ節はかなり強いです。コンクリ壊しちゃうくらい。同僚に木内さんというやつぱり強面の人があります。

好きだけど、ぎりぎり上手く行つていない感じの一人の時々不思議な日常です。

一話完結方式。掌編群。

「なんであって、聞かなくても分かるけど。」

うふふ、

そう笑って千鶴は三津を見た。田元の緩みは、全てお見通しだといつているようすで、少しばかりいたたまれない。

「あたしの時、何であって聞かなかつたでしょ？三津は。」

「……聞かなくとも分かつちゃつたから。」

歳で言えぱまつほど離れている姉は、まつりぬ、と、ストローを噛んだ。

姉と自分では、両親の対応が違う。けれど、千鶴が愛情を知らずに育つたはずがないのだ。母などが顯著に嫌う水芝の家の白魚などは言葉を濁すけれども、三津は姉の宝物を知っていた。

白いアルバム。

彼女が家を出るまで、三津はその存在を知らなかつた。姉妹揃つて家をでて、やつと一息ついたときに教えてもらつたのだ。ぱきぱきと、古びた紙ならではの音を立てて開かれたページには、幸福の絵があつた。

自分の知らない、真砂千鶴。

家では見たことのない、幼い姿。

「ああ、そうか、

その時やつと得心が行つた。何故家にはひとつも千鶴の成長記録

がないのかを。

・・・」のひとこ、

『10れこ　トキさんと』

拙い文字で書かれた注釈に、涙が溢れた。姉は世界中の誰よりも幸福だったのだと。百魚にそうなのだろうと詰め寄つたらば、あのマツドサイエンティストは渋い顔で頷いた。

三津は鶴という男が羨ましくてたまらなくなつた。誰かを一途に思つことの重さを姉に教えた人間は、柔和な表情とは裏腹に、とてもなく勘の鋭く、くせの強いひとだった。そして姉がいなければ身も世もなかつたひとでもあつた。だから先に逝つたのだろうと、三津は思う。残される千鶯の事など何も考えず、唯唯、一人で幸福でありたかつたと、それだけを望んだのだと思わせた。身も世もない。

そんな風に、自分は彼に愛されているだらうか。
答えは否である。

「姉さんは、鶴さんじゃなくとも幸せ？」

「トキさんは幸せと、柊一郎さんは幸せは、」

違うの。

からん、

氷が解ける。グラスをしたつる水滴が、姉の思い出のひとびとつのように、胸が痛い。

「百魚も別の意味でトキさんの次に好き。」

「別の意味?」

「二人とも、似てるでしょ?」

トキさん。」

「百魚は分かるけど、あの二が?」

「似てるんだもの。」

ふく、と頬を膨らました彼女は、血のつながりの姫原田を抜きにしても、大層愛らしかった。きっと水芝鶴が植えつけた苗が、成長したものなのだろう。

「ああ、あの二は、

あの二は苗床ごと好きなのだ。千鶴が。成長して花開き実を結んで、そしてまた芽吹いた千鶴が好きなのだ。

妹として、ありがたいのと同時に、鶴同様、柊一郎さえ羨ましくなった。

何しろ姉は一途である。懸命である。

「あたし、三津も大好きよ。」

濁りのない笑顔に、自分も浄化されるから。どうしても、三津は千鶴の傍に居たい。誰とどうなるつとも、千鶴は自分と切れない縁があるので、言いふらしたくてたまらない。

「やつ、三津も好きだから、まあ、あの男でも我慢してあげる。」

少しばかり不服そう、ガラガラと氷とアイスティーを混ぜ合わせる。

「……姉さん、ヤキモチ？」

「うふ。」

だって、

「三津は、あたしの妹なのに。」

自分は絶対の幸福の恋愛をしているわけではない。むしろ、千葉のよしよな恋愛が稀なのだ。

「姉さん、」

「なあに？」

「あたし、最後は姉さんに泣き付くと思つわ。」

だって、多分、彼は、最低だ。

自分を好きなくせに、すぐに夜に溶けようとする。
だから、

「あたしには多分、姉さんしか残つてない気がするの。」

最後の最後には。

「良じよ。」

笑んで、千鶴は三津の髪を撫でた。

「三津は思い切りぶつかって来れば良いよ。」

好き、の塊をもって。

「それが毀れたら、あたしがアイツを泣かすから。」

あの頑健な男をどうしたら泣かせることが出来るのか。こいつなつては、悩むところはそこだけだ。なんといっても、落ちた先には姉とこつクッシュョンがある。三津が毀れる事なんてありえない。

「うそ、やうやく。」

良く似ている、と言われる面差しで、三津は姉に髪を梳かれる感触を味わった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4018ba/>

Lace Edge

2012年1月10日17時48分発行